

編 集 後 記

先日の参院議員選挙で自民党が歴史的な大敗を喫し、1955年自民党結党以来占めてきた参院第1党の座を明け渡した。政治のことは全くわからぬ門外漢であるが、年金記録問題や政治資金問題などいろいろあったとは言え、ちょっとしたきっかけで与野党の大逆転がいつも簡単に起こる。今、日本の政治はとても不安定で危機的な状況なのだと感じる。危機的な状況は決して我々の医療の領域のみではなく、政治、経済、否、国民生活全体がある意味で危機的な状況にあり、老後問題に代表されるような大きな先行き不安を抱えている。医療事故からの医師刑事訴訟事件や勤務医の燃え尽き・離脱、地域医療の過疎化など昨今叫ばれている“医療崩壊”はこれら日本の現代社会の諸相の危機とすべからず連動しているのは明白である。明治維新以降急速に移入された西洋の合理主義、資本主義、個人主義が十分に咀嚼されぬまま、日本人の意識、考え方自体に微妙な歪みを生じさせ、一種の金属疲労を起こして亀裂を生じてきているのが今の日本の現状ではないかと思考する。その中であって、本誌の健全な継続、発展はある意味、驚きでもある。多くの邦文学会誌がいずれも投稿論文数の確保に苦心し、依頼の特集企画等によってかろうじて最低限の紙数を維持する中、本誌の年間投稿論文数は例年300数十編の多きに及んでいる。昨年1年間（平成18年5月～平成19年4月）は、原著論文34編、症例報告303編を含め総数355編で、採択率はそれぞれ62%、67%となっているが、投稿論文の質は押しなべて非常に高い。症例報告の場合、疾患の希少性に不足があるなどで不採用とする場合もあるが、論文の内容としては十分推敲されており他誌ならば採用だろうと思われるものも多い。本誌のレベルを維持、向上させていくために、委員たちが仔細に査読、吟味、再査読などを行った上での結果であることを会員諸賢にはご理解いただきたいと思う。40巻6号の編集後記で杉山正則委員も同様の感懐を述べておられるが、今日の極度に多忙な日常診療に追われる中を執筆する会員、また投稿にあたって指導される指導医の先生方のご努力に頭の下がる思いである。

（富田尚裕）